

第一問

問一 女性労働者の賃金は男性より不当に低く設定されているのに、家族全体がそうした彼女たちの収入に頼って生活せざるをえない状況にあること。

問二 女性を単純作業に適した補助的な稼ぎ手と見なし、男女の賃金格差を自明とする社会通念に支えられ、経営者が従順で生産性の高い女性労働者を低賃金で大量に雇用し、大規模工場生産によって不当に利益を得ること。

問三 経済単位としての世帯の結束を重視する家族観のもと、工場で働く未婚女性は収入と一定の自由を手にしたが、賃労働は家計への貢献という親への義務を果たす手段にすぎず、家庭内での地位の向上につながらないこと。

問四 男女格差を容認するジェンダー規範や家父長制的な家族観が残存するなかで、世界規模での産業資本主義の進展により、女性が多額の賃金で工場労働に従事する状況が広く見られるが、複数の地域調査から浮かび上がるのは、賃労働が女性の地位向上に直結しない一方で、個々の人生の選択の幅を広げ、自由の感覚を与えるという、矛盾に満ちた多様で複雑なありようであり、それは単純な善し悪しでは評価できないということ。

第二問

問一 土手の下の一ぜんめし屋で、隣の連れの中にいる年寄りの声を聞き、たまたま悲しくなるが、そのわけもわからないまま、ただ一人でじっと身をひそめている状況。

問二 気になる人の声ははっきりしてくるにつれ、なつかしさがあふれ、その人物が語る蜂と「子供」の話が、「私」自身の幼時の記憶として鮮明に蘇ってきたから。

問三 すぐ隣にいるのに、「私」の声は向こうに通じず、父の声は時間差で耳に聞こえてくるという、「私」と父たちとの間の不思議な隔たりを表すとともに、この小説がリアルな世界ではなく、「私」の心象によって構築されていることを示す効果。

問四 人なつかしさが身に沁むような孤独な思いでいたところ、はしなくも父親に再会したと思っただが、連れと語り合う父の声は聞こえるものの、「私」が泣きながら呼びかけた声は父に通じず、そのまま別れ別れになり、一人取り残されたことで、さびしさがいつそう胸に迫ってきたから。

第三問

問一 賀茂の祭の使者に指名されたこと。

問二 (2) 情趣を解する女

(3) 華やかで美しい扇

問三 ①

問四 長い間三条の右の大臣の訪れがなく、男女のあいだで扇をとりかわすという不吉なことをいまさら避けてもかいたくないと思われるほど、すっかり見捨てられていることをつらく思う心情。

問五 男女のあいだで扇をとりかわすのは不吉だといって忌み嫌ったのに、私のために扇はないと言ってくれないのは、誰が薄情であるのか。私よりあなたの方が薄情ではないか。

第四問

問一 口

問二 敵対する国は我が国の文章を目にして知恵のある人物がいることに気づく。だから我が国を敬遠して攻めこまない。

問三 海外に示すに、仁沢の広きを以てし、

問四 文章は、我が国の文化水準を高めて国内をうまく治め、外国には威信を示し敬意を集めるといふ効能がある。(四十九字)